



みんなどう過ごしたい？ これからの図書館・公民館 さまざまな市民のみなさまの声から 未来をのぞく集いを開催しました。

2026年7月26日(日)、長岡京市立図書館の3階大会議室で

Voice NAGAOKAKYUに集まった市民の声を読み解くトークイベントを行いました。

「静か」と「気軽」の共存

当日データの分析と発表を担当してくれたのは、Voice NAGAOKAKYUを提供する株式会社Liquitous(リキタス)の栗本拓幸さんです。1,600件の投稿をテキスト分析し、ワードクラウドとAI分析の結果を発表してもらいました。最多の「本」に続いて目立ったのは「スペース」「カフェ」「場所」「子ども」「空間」「静か」「気軽」といったキーワードでした。面白いのは、「静か」と「気軽」が同時に多く現れていることです。静かにしたい人も、気軽に來たい人も、それぞれ強い思いを持っています。一見矛盾しているようで、これが今の長岡京市民の正直な声なのだと思います。

さまざまな学びのスペースを 求める声

自習、学習スペースを重視する声が多かったです。フリーの自習席、個別ブース、グループ学習室……いろんな声がありましたが、私が注目したのは少人数席への支持の強さです。10年ほど前は7〜8名が使えるグループ学習室のニーズが多かったのですが、今は4人程度の少人数席への支持が顕著に増えています。長岡京市民は現在のニーズに対して非常に敏感だと感じました。高校生からの「家以外に放課後勉強できる場所がない」という声には、会場のあちこちでうなずく姿が見えました。座席と空間デザインの話で、私が会場に伝えたかったことがあります。図書館3階や公民館3階から見える八条ヶ池と長岡天満宮の眺望のことです。「40年前に今の文化ゾーンをつくった人たちのセンスがめっちゃくちゃいい」と言うと、共感が返ってきました。この眺望は長岡京市の図書館、公民館にとって本当に大切な資源で、これを活かさない手はありません。景色を見ながら

本を読める窓際席、眺望を楽しみながらコーヒーを飲めるスペース。そういう設計の可能性を、今回のリノベーションで真剣に考えたいと思っています。

ルールより文化をつくる

会場で私が一番伝えたかったのは、ルールと運営についての考え方でした。「ルールで何とかするのはほぼ幻想です」と言うと、苦笑いしながらうなずく参加者が多くいました。行政が上から定めたルールは守られにくいのです。市民自身がルールをつくる側に回ることが、最も現実的で持続可能な方法です。「何々してください」ではなく「こういうことをしようよ」という文化をつくっていくことが大切だとも話しました。「してください」と言われた瞬間に人は冷めます。でも「しようよ」と言われると、一緒にやろうという気持ちになります。この場所をどう使うかのルールも、市民が一緒につくっていくものにしたいと思っています。

(文責：岡本真 arg)



Voice NAGAOKAKYUに集まった声の分析結果や論点は「分析」ページで閲覧できます。